

## 唐代詩人・王維の衣冠墓について

内 田 誠 一

A Study of the Tomb Containing Personal Effects of the Tang Dynasty Poet Wang Wei

Seichi UCHIDA

### 要 旨

唐代詩人の王維は、生前、最高の宮廷詩人として尊敬を集め、没後は代宗皇帝より「天下の文宗」という最大級の評価を与えられた。この大詩人の墓は、輞川莊址に造営されたが、これとは別に衣冠墓が造営されたようである。筆者が資料上確認できた現存する王維の衣冠墓は二か所。本稿では、そのうちの一つである山西省祁県の墓について、文献整理と両次に互る実地調査を基に考察した。

祁の地は、晋の平公が大夫の祁奚に賜った領地で、祁奚の城邑が即ち現在の下古県。この下古県に王維の衣冠墓が残っている。当地の伝説では、王維が従弟の王綏に対して「身後骸骨乞遷故土」と遺言したために、この地に衣冠墓が造営されたとされる。衣冠墓造営の契機に関わる伝説の当否はともかく、祁奚城邑のあった現在の下古県村に衣冠墓が造営されたということは、下古県村こそが王維の故郷である、という可能性を考えることができるのではないか。

キーワード：唐代・王維・衣冠墓・山西省・祁県

### 一、はじめに

唐代詩人の王維は、その活躍した天宝年間に最高の宮廷詩人として多大の尊敬を集めた。王維の没後、弟の王縉が皇帝に奉った上奏文に「進集表（集を進むるの表）」がある。これに対する代宗皇帝の答詔に「卿の伯氏は天下の文宗たり。位は先朝に歴（へ）て、名は希代に高し」という評価があり、王維文学の「総括」を特筆大書したものと解せられる。同時代人の王維に対する評価が、李杜への評価を遥かに凌ぐものであったことは言うを俟たない。

この大詩人の墓は、自身の壮大な別業「輞川莊」（王維は晩年にこれを国家に喜捨し、後に清源寺となった）址に造営された。しかし、墓はこれだけにとどまらず、他の地にも建立されたようである。王維の衣冠を埋葬した衣冠墓がそれである。中国では衣冠冢（yīguānzhǒng）と言う。『史記』の封禪書に「上曰く、『吾 黄帝死せずと聞くに、今冢有るは何ぞや』と。或るひと対（こた）へて曰く、『黄帝 仙を以て天に上り、群臣 其の衣冠を葬る』と」とある。これが歴史に記載された最も早い衣冠墓の例とされる。

皇帝から「天下の文宗」と称賛された王維。その衣冠墓は、有縁の地に複数建立されたものと推測される。現在では山西省祁県と河南省方城県の二か所に残っていることが確認されている。

本稿では、そのうちの山西省祁県の下古鎮下古村の衣冠墓に関する文献整理、および2014年5月と8月の両次に亘る祁県での実地調査を基にしながら、この衣冠墓について些か考察を進めてみることにする。

## 二、祁県の衣冠墓について

祁県は古くは昭餘と称し、現在では山西省の中部に位置している。祁県は、昭餘鎮・東観鎮・古県鎮・賈令鎮・城趙鎮・来遠鎮・西六支郷・峪口郷の六鎮二郷から成り、人口は27万人（2013年）。『旧唐書』の王維伝に「太原祁の人」とあるが、この「祁」は現在の祁県に他ならない。祁の地を王維の祖籍とするか出生地とするかについては議論があるが、王維の故郷であることに異論はないであろう。祁の地からは歴代著名人が多く輩出され、唐代に限っても、温大雅（572-629・思想家）・温彦博（573-637・唐初の宰相）兄弟、王勃（650-676・初唐の四傑）、王仲舒（762-823・詩人）、温庭筠（812-866・詩人）等がいる（祁県を祖籍とする人物を含む）。

さて、その祁県の下古鎮下古村に王維の衣冠墓が残されている。祁は、晋の平公が大夫の姫奚（前620-前545・後に地名の「祁」を姓とした）に賜った領地。姫奚（祁奚）の城邑が即ち現在の下古村である。王維の墓は由緒正しい土地に建てられているわけである。試みに乾隆45年版『祁県志』巻四「古蹟・墳墓」の唐の項を繙くに、王維の衣冠墓は掲載されていない。

『中国文物地図集 山西分冊（下）』（中国地図出版社、2007年）の晋中市・祁県の箇所では、「31-B12 古県墓葬 [古県鎮古村・時代不詳・県文物保護単位]」という項目を立てて（775ページ）、次のように解説している（拙訳・以下同様）。

唐代の大詩人王維の衣冠墓と伝えられる。王維（?—761）、唐代詩人・画家、字は摩詰。太原祁（今の祁県）の人。その父は蒲州（今の山西省永済市）に家を移し、そのまま蒲の人となった。官は尚書右丞に至り、世に「王右丞」と称せられる。本来、地表には円形の封土（内田注：盛り土）が一座あったが、1960年代に削られて平坦となった。

『古県鎮志』（古県鎮志編纂委員会、1987年）「第四十六章 古蹟」の「四、古墓」に、祁県には晋の大夫・祁奚から明代の官僚・戴賓まで、歴代著名人の墓が九基残っていることが記されている。さらに、王維の衣冠墓について以下のような説明がある。

上述した墓塚以外に、下古村西南の西坡のほとりに唐代著名詩人の王維の衣冠墓がある。生前の名声が比較的高かったので、墓丘も他の墳墓に比べてかなり大きく、面積は0.5畝（ムー）（内田注：約333㎡）に達する。俗に「王墓」と呼ぶ。

墓の面積は日本流に言うと百坪ほどであるが、広大な中国ではそれは大した広さではない。建立当時の墓域はもっと大きかった可能性が高いであろう。また、「第四十二章 歴史人物」には次のように書かれている。

王維は妻を亡くして再び娶らず、母に対する孝行で名高かった。郷愁の心が深く従弟の王緱に対して「身後骸骨乞遷故土（私が死んだら、遺骨を故郷の土に戻してほしい）」と言っていた。死後に母と同じく藍田の輞川に埋葬されたが、併せて衣冠墓が下古村の西坡の地に造営されたのである。

現代中国ではよく「葉落帰根（yèluò guīgēn）」という。木の葉はもともと木の根から生み出

されたものであるが、最後には枯れ落ちた葉がまた木の根もとにもどる、という意。「他郷に旅する人も最終的には故郷にもどるべきだ」という比喩で使われることが多い。同様の内容を表したものに「水深ければ則ち回（めぐ）り、樹落ちて本を糞（つちか）ふ」（『荀子』巻九）がある。中国人は古来より故郷を重んじ、死後は故郷に葬られることを望んだ。よって、王維が王綏に「身後骸骨乞遷故土」と遺言したというのは、極めて常識的なことであると言える。この伝説は、我々にそれが真実であると思わせるに十分な内容である。実際に王綏に遺言したのであれば、当時、王綏が官を辞めて祁の地（王維とその一族の故郷）に戻って隠棲していたのかもしれない（それは後に掲げる王維の詩からも容易に想像できる）。でなければ、わざわざ王綏に頼む必要はないからである。ただ、勿論この話は伝説であるから、どこまで真実であるか、今となってはつきとめようがない。

王綏への遺言とは異なり、結局、王維は母の傍に眠ることとなった。王維の母は既に輞川荘内に埋葬されていた。「所謂王維画」（王維画のアトリビューション）である宋代の「輞川図」に描かれる母塔墳がそれである。母親思いの王維にとってみれば、亡母の傍に葬られることは誠に好ましいことと思われる。輞川荘内に埋葬することに関しては、弟王縉の意向がかなり反映されていると想像される。長安近郊の輞川の地に造営すれば、交通の利便性に加え、かつて兄弟や親友たちと同じ時間・空間を共有した芸術性の高い輞川荘址で、王縉は亡兄を追懐できるからである。さらに、そこは喜捨されて仏寺と化しているのので、多くの僧侶が日夜王維の追善に励んでいる最高の宗教空間でもあったわけである。後に「佞仏」とまで評されるほどの崇仏家・王縉にとってみれば、至極当然な選択といえよう。またその選択は、輞川荘址の寺院に参詣する王縉をして、己が宗教心と矜持心とを頗る満足させたに違いない。既に国家に喜捨したとは言え、亡兄の故居そのものが追善の大伽藍と化していることは、望みうる最上の供養に他ならず、極めて贅沢なことだからである。

しかし、やはり故郷の祁の地にも衣冠墓が造営されることになった。仮に当地の伝説を信ずるならば、従弟の王綏が王維生前の願望を聞き入れる形で、建墓されたものと想像される。また、王維の衣冠を葬るのであるから、当然、王綏が王縉に対して王維愛用の衣冠等の形見分けを申し出たのであろう。

ところで、王維がその王綏に贈った詩がある。

贈従弟司庫員外綏 従弟の司庫員外綏に贈る

少年識事淺	少年識（し）る事淺く、
強学干名利	強いて学びて名利を干（もと）む
徒聞躍馬年	徒（いたづ）らに躍馬（やくば）の年を聞くも、
苦無出人智	人に出づるの智無きに苦しむ。
即事豈徒言	事に即して豈（あ）に徒言せん、
累官非不試	官を累（かさ）ねて試みざるに非ず。
既寡遂性歛	既に性を遂ぐるの歛び寡（すくな）く、
恐招負時累	時に負（そむ）くの累を招くを恐る。
清冬見遠山	清冬 遠山を見れば、
積雪凝蒼翠	積雪 蒼翠（そうすい）を凝（こ）らす。
皓然出東林	皓然（こうぜん）として東林を出で、
發我遺世意	我が世を遺（わす）るるの意を發（おこ）す。
惠連素清賞	惠連（けいれん） 素（もと）より清賞にして、
夙語塵外事	夙（つと）に塵外の事を語れり。

欲緩携手期 手を携うるの期を緩（ゆる）うせんと欲するも、  
 流年一何駛 流年 一（いつ）に何ぞ駛（はや）き。

官界では自己実現が困難であり、俗世を離れて隠棲したいという王維自身の願望が詠じられる。また、王綵と一緒に隠棲する約束をしていたが、なかなかその約束を果たし得ないことを悔やんでいる。結局、王綵と共に隠棲することが叶わなかった王維が、王綵が隠棲していたと思しき故郷の地に葬ってほしいと遺言したという伝説。これは、「贈従弟司庫員外綵」の詩意を踏まえて考えるに、極めて自然な願望であり、事実であるようだと思わせるものである。しかし逆に、この詩の内容から類推して、王維が王綵に遺言したのではないかと古代の当地の知識人が考え、それが伝説化したという可能性も大いにあろう。その土地で勢力を誇る知識人が推測したことが、有力な説として広がり、さらにはそれが恰も事実であるかのように伝えられることは不思議でないからである。

### 三、実地調査記録

筆者は、2014年5月24日から29日まで、山西省の臨汾・平遥・祁県・太原等の旧跡調査を行った。27日に祁県の下古県村（図1）に赴き、王維の衣冠墓を調査した。祁県でチャーターしたタクシーの運転手が偶々該村の地理に詳しくだったので、スムーズな調査が可能となった。下古県村民委員会を訪ねたところ、当地に王維の民間研究者である王少丁氏（1951年生）が住んでいるとの情報を得たが、あいにく同氏が不在で面会することができなかった。

そこで、8月13日から15日まで、再び太原と祁県の旧跡調査に赴いた。今度は王少丁氏と面晤する機会を得て、氏の案内で王維の墓を再度調査することができた。王氏は調査後に我々を自宅に招き入れて御教示下さった（注1）。氏は「王」姓であることから、専門の英語とは別に王維を研究されているものと推測される（中国では氏族意識が極めて強い）。



図1 下古県の祁子大街（樹木の向こうに見える外壁に「密接聯係群衆、建設美麗古県」のスローガンが書かれている）

二回の調査で得られた事柄は以下の通りである。墓には、1980年代後期の墓碑が建てられていた。碑陽には、隸書で「唐尚書右丞王維 衣冠之冢」と一行に刻し、左に小楷で「公元一九八七年七月祁縣文物管理所 立」とあった（図2）。



図2 墓碑の碑陽、および核桃（胡桃）や酥梨が植えられた畑

碑陰には、1987年の渠伝福撰文にかかる「王維衣冢塚維修記」（注2）が繁体字で全十行にわたって刻されていた（図3）。

前に引用したように『文物地図集』には、「本来、地表には円形の封土が一座あったが、1960年代に削られて平坦となった」とあった。実地調査では、確かに、封土があったと思しき場所（墓碑の後方）は平坦になっていた。現在では農地に転用されて、核桃（hétáo・くるみ）の大木や沢山の梨の木が植えられていることを確認できた（図2の石碑の左後側の畑を参照）。

王少丁氏は、墓の封土は文化大革命で破壊されたと回想した。なお、古い墓碑も文革時に破壊されて無くなったと思われる。墓の封土が平らになってから植えられた梨は、当地の作物であって特に寓意はないとのこと。墓前にも核桃の大木があり、墓の両側には梨が植えられていた。祁県の「酥梨（そり／sūli・身の軟らかい梨）」は全国的にも有名な特産品であり、千年以上の栽培の歴史がある。王維が幼少期に祁県で育ったのであれば、この種類の梨を食べたことであろう（注3）。



図3 碑陰の「王維衣冠冢維修記」

ところで、文革前に修復された王維の墓には、「劉秀磚」が使われていたと王少丁氏が言っていた。漢代の墓に使われた磚が模造されて、後代でも使用されることがあったのであろうか。

#### 四、おわりに

没後まもなく、時の絶対的権力者から「天下文宗」という至上の評価を与えられた王維である。その関係者が、王維と因縁のある場所に複数の衣冠墓を造営したことは容易に想像できよう。その造営は偉大なる詩人の才徳を称揚するのみならず、造営する該地の人々にとっても、その場所が王維有縁の地であることを喧伝し、土地の名声を大いに輝かしむることに繋がるからである。

例えば、現代日本のように民主化・平等化の進んだ社会では、権力者と雖も絶えず民衆の指弾にさらされ、その地位や名声も絶対的なものでは決してない。しかし、古代社会においては、絶対的権力者とその周囲に存在する文化人は、現代の日本人の想像を遥かに超える多大な尊崇を集めていたわけである。現代中国でも共産党の要人や文化人の視察訪問は、現地の人々にとって大変な名誉となっている（注4）。中国各地の著名な名所旧跡に赴くと、新中国成立以後の歴代国家領導や著名人が来訪した折りの写真がパネル展示されているのを多く目にする。ましてや古代では、その土地と少しでも関わりのある政治家や著名人の詩碑を立てたり、衣冠墓を造営したりすることは、なおさら名誉なことだったのである。

さて、祁県の衣冠墓については、王維から依頼された王隸が、亡き王維の遺志を尊重して造営されたという伝説が残されている。その伝説がどこまで事実なのか、今となっては詮索することは不可能である。しかし、その地が大詩人・王維の故郷であれば、衣冠墓を造営したいと考える人物が出て来るのは、洵に自然な成り行きであろう。

さらに、祁奚の城邑のあった現在の下古県村に墓が残されているということは、その場所が祁県の中でも王維と極めて関係の深い土地であったと考えるのが穏当であろう。『旧唐書』王維伝には「太原祁の人」とある。祁（現在の祁県）の地といっても広い。その中でも、祁奚の城邑のあった現在の下古県村こそが王維の故郷である、という可能性を考えてもよいのではないか。

#### ■注

注1：王少丁氏は『祁県人物志 1919～2010』（山西出版集団・山西経済出版社、2011年）に掲載されたご自身の履歴を示しながら自己紹介された。氏は山西大学外国語学部卒業の知識分子で、当地の各高校の英語教師を歴任し、該県の「優秀教師」、「晋中地区優秀輔導教師」の称号を得た人物。著作に『英語情景対話』がある。同氏の厳父・王中先氏も教育一筋の人物で、祁県の中学校長、職業高校校長兼書記などの重職を歴任した。父子ともに当地の名士である。また、古い家譜（家系図）を見せていたのだが、王少丁氏の先祖は明代に河南省方城県からこの祁県に移住してきたことが記されていた。方城県にも王維の衣冠墓があるので、本当に王維と縁のある方と言えよう。

注2：「王維衣冢塚維修記」の本文は以下の通り（斜線は改行を表す）。「唐代大詩人王維(699年-761年)、字摩詰。佛教有《維摩詰經》、是其名字淵源、亦爲“詩佛”／稱號由來。王維詩書畫皆負盛名、尤精音律、曾任太樂丞、官至尚書右丞。王維擅長各種詩體、尤以五／言律詩和絕句著稱。其詩歌、早期富于進取精神、情調慷慨激昂、充滿浪漫主義豪情；後期描寫田園山水景物、表達閑情逸致、宣揚佛教禪理。其山水田園／詩、作物精細、狀寫傳神、色彩鮮明如畫、語／言清新凝練、是其藝術風格和成就的最高體現。蘇東坡曾評曰：“味摩詰之詩、詩中有畫；觀摩詰之／畫、畫中有詩。”王維詩不僅名揚當時、更令後世奉爲經典、《唐詩三百首》選其二十九首、可見影／響之盛。正史記載、王維爲／太原祁(今山西祁縣)人。其父王處廉、“終汾州司馬、徙家于蒲、遂爲河東人。”以此而論、王維幼時極可能生長于祁縣。下

古縣村王維衣冠冢，故老相傳，存在久矣。／渠傳福 撰文 丁卯年丁未月

注3：衣冠墓付近の酥梨は、果実が一つ一つ赤い紙で覆われており、出荷用に大切に育てられていることがわかる。王氏は一つ握いで筆者に下さった（中国の農村では、他人の作物であっても一つ二つ勝手に取って食べることは日常的なことである）。

注4：2014年7月27日に、筆者は偃師市佃莊郷東大郊村で「辟雍碑」（278年刻）を参観した。その際、鍵を開けてくれた村の古老が、「1958年に、ここに郭沫若が来たんだ」と自慢げに語った。郭沫若は毛沢東の詩友。かかる著名人の来訪は、村人にとってこの上もなく誇りうる名誉なのである。

■付記1

筆者は平成26年度前期に、安田女子大学長期海外研修員として、中国山西省の運城学院に約半年間派遣された。本稿は、運城学院河東文化研究センターにおいて訪問学者として研究を行なった成果の一部である。

筆者の海外研修を御允許下さった安田女子大学、筆者を格別に厚遇して下さった運城学院、そして同学院において懇篤なる御指導をいただいた万徳敬博士に対して、心より鳴謝申し上げる。

■付記2

学術調査においては、運城学院の学生である秦江涛・徐捷の両君が同行し、筆者を幫助してくれたことを茲に感謝する。

[2014. 9. 25 受理]